

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02827

研究課題名(和文) 子どもの自尊感情と学級の心理的安全性の醸成を促す学校改善プログラムの開発的研究

研究課題名(英文) Developmental research on school improvement programs that promote children's self-esteem and classroom psychological safety

研究代表者

久我 直人 (Ku, Naoto)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：20452659

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：アセスメントデータを共分散構造分析し「子どもの内面と行動の構造」を可視化した。結果、子どもの「**自他信頼**」を基底要因として、「**学びに向かう力**」と「**人と繋がる力**」が支えられている構造的な繋がりが可視化された。この子どもの内面と行動の構造を実践研究校の全教職員で共有し、この構造に適合した「**効果のある指導**」が組織的に策定された。子どもの内面(自尊感情)を整える**勇気づけ教育**が組織的に実施され、さらに、子ども同士の信頼関係を醸成し、「**心理的安全性**」を高める「**相互承認の仕組み**」が導入された。

結果、子どもの「**自分への信頼(自尊感情)**」の高まりと、**学びへの意識の高まり**や**生活の安定**がデータから確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会的、学術的な意義として、「**子どもの内面と行動の構造**」を可視化するアセスメントシステムが開発されたこと。子どもの内面と行動の構造をもとに、子どもの「**学びに向かう力**」と「**人と繋がる力**」の基底要因として「**自己信頼**」が、位置つくことが可視化されたこと。この構造を基に、実践研究校において、全教職員による**勇気づけ教育**が策定され、組織的に実施された。さらに、学級の「**心理的安全性**」を高める「**相互承認の仕組み**」が導入されたこと。結果、子どもの「**自分への信頼(自尊感情)**」の高まりと**学びや生活の安定**がデータから確認されたこと、であった。

学校教育の改善に資する成果が得られた。

研究成果の概要(英文)：Through a covariance structure analysis of the assessment data, the ``structure of children's inner lives and behaviors'' was visualized. As a result, the structural connections that support children's ``ability to learn'' and ``ability to connect with others'' were visualized, with children's ``trust in self and others'' as the underlying factor. This structure was shared among all faculty members at the School of Practical Research, and ``effective initiatives'' were systematically formulated. Encouragement education to raise children's self-esteem was systematically implemented, and a ``mutual recognition system'' was introduced to increase the ``psychological safety'' of the classroom.

As a result, the data confirmed that children's ``self-esteem'' increased, their awareness of learning increased, and their lives became more stable.

研究分野：学校経営学

キーワード：自尊感情 心理的安全性 教職員の協働 子どもの内面と行動の構造

1. 研究開始当初の背景

今日の日本の学校教育において、学力低下やいじめ、不登校、学級崩壊等の諸問題が顕在化するなか、教育行政、学校はその問題の解消のために学力向上プランやいじめ防止システム等を策定し、その対応を試みていた。しかし、生起する問題への対症療法的な対応が、逆に教職員の多忙化を招き、疲弊につながり、負の連鎖が生み出されるといふ構造的な課題が読み取れた。

今一度、子どもの主体的な学びや潤いのある生活を生み出す主たる要素とその構造を解析し、その構造に適合した「効果のある指導」を組織的に展開する学校改善プログラムを構築し、小さなエネルギーで大きな効果を生み出す教育再生のシナリオを明示することが求められた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、学校現場において生起するいじめ、不登校等の問題を低減し、確かな学力と豊かな社会性を育む、効果的な学校改善プログラムを開発することである。このことを実現するためには、教職員の協働による組織的で、効果的な指導が求められる。

そのために、子どもの学力向上と社会性の醸成において、効果のある指導を抽出し、それらを構造的に整理すること(指導論)、その効果のある指導を組織的に展開することを可能にする学校組織マネジメントの展開手順を整理すること(組織論)、を主たる研究課題とする。そして、指導論と組織論を融合した「効果のある学校づくり」を促進する学校改善プログラムの開発を本研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究課題の設定

この目的を達成するために、以下の4つの研究課題を設定した(図1)。

子どもの主体的な学びと社会性の醸成を促す主たる要素を抽出し、子どもの内面と行動の構造を明示することとともに、その構造に適合した「効果のある指導」を開発すること(指導論)
教職員の組織的な協働を生み出す「組織化プログラム」を学校組織マネジメントの理論に基づいて構築し、その展開過程を明示すること(組織論)
構築した「組織化プログラム」に子どもの内面と行動の構造に適合した「効果のある指導」を組み込んだ「効果のある学校づくり」の展開過程を明示すること(指導論と組織論の融合モデルの開発)
「学校改善プログラム」の実践研究の検証を踏まえ精緻化すること(モデルの検証)

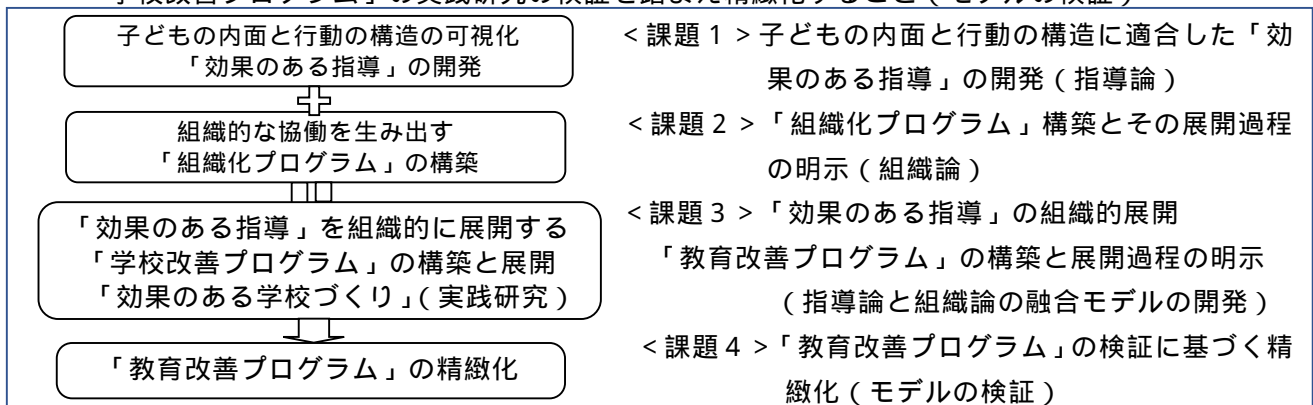


図1 研究の課題

(2) 「子どもの内面と行動の構造」の可視化と効果のある指導の抽出

久我(2014)は、中学生の学習への意欲と規範意識を支える構成要素として、自分に対する信頼、被受容感、他者への信頼(保護者、教師、友達)、学習に対する内面と行動、学校生活における内面と行動(「生活規範」)を整理し、その構造を共分散構造分析ソフト IBM SPSS Amos Ver.19 を用いて可視化している。

さらに、この生徒の内面と行動の構造に適合させた「効果のある指導」を仮説的に設定し、実際に学校現場に導入している。そして、学力向上と生活規範・社会性の醸成(いじめの低減等)において、一定程度の効果が検証されている。

これら知見を援用し、学校ごとの「子どもの内面と行動の構造」について精緻化を進め、その構造に

適合した「効果のある指導」の抽出をすすめた。具体的には、子どもの自尊感情を高める「勇気づけ教育」と学級集団の心理的安全性を高める「相互承認」の取り組み等が位置づけられた。

(3) 教員の組織的な協働を生み出す「組織化プログラム」の構築

久我(2011)は、「教師の主体的統合モデル」を開発している。教師自らの手で子どもの実態から課題を生成し、重点目標を策定して、主体的な協働を生み出す仕組みとしている。そして学校の組織化について一定程度の効果が検証されている。このモデルを援用して、各学校の子どものアセスメントデータから導き出された「生徒の内面と行動の構造」に基づいて自校の課題を生成し、解決する「組織化プログラム」の展開過程を開発した(図2)。

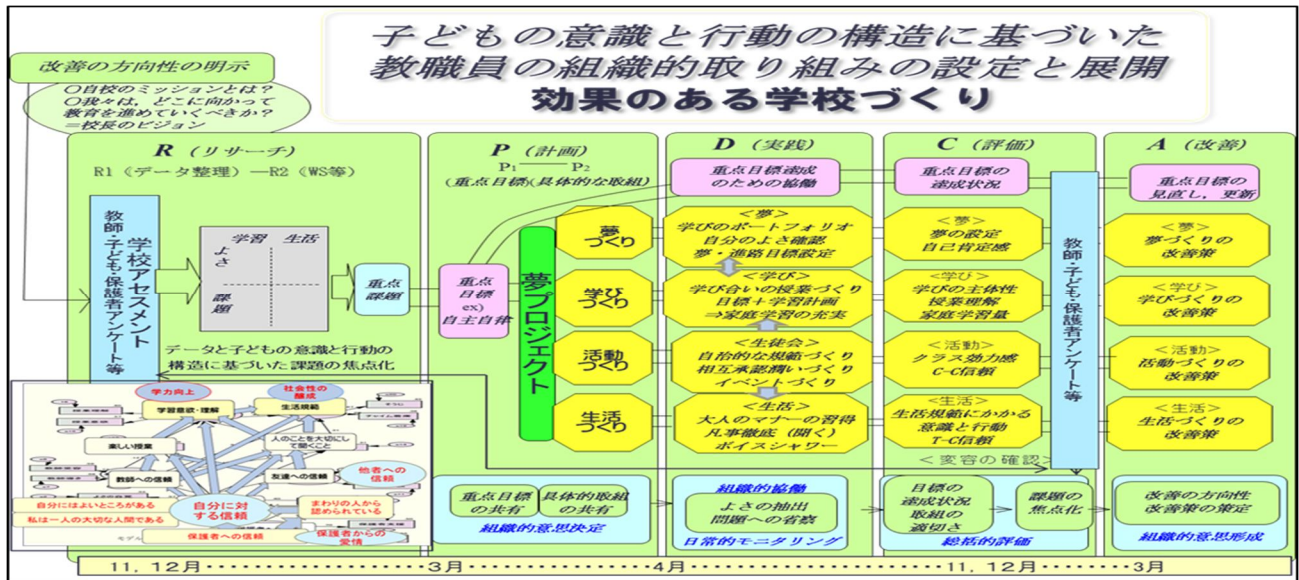


図2 自校の課題に基づく「教師の主体的統合モデル」(久我, 2011, 一部修正)

その具体的手順は、自校の子どもが抱える教育課題をエビデンスベースで可視化する(R)とともに、組織的にその教育課題解決のための具体的な取組を策定し(P)、教職員の協働を通して展開する(D)ことで、子どもの変容を生み出し、次なる課題をデータに基づいて生成する(C・A)、組織的な教育活動の展開である。全員参加の主体的な協働を生み出す学校組織マネジメントである。特に、各校の実態等によって異なる子どもの内面と行動の構造を学校ごとの分析を行い、その特徴を可視化して取り組むべき教育課題の共有を図った。本プログラムを小学校1校、中学校2校、高等学校4校に導入し、その効果の検証を行った。

4. 研究成果

開発した本プログラムを小学校1校、中学校2校、高等学校4校に導入し、その効果の検証を行った。校種、学校規模、子どもの実態等が異なるそれぞれの学校において、子どもの変容と教職員の協働の促進等、一定の効果が確認された。

これらの中で、高い進学実績を示す実践研究校(高等学校;以下、「A校」とする)の事例を紹介する。

(1) 「生徒の内面と行動の構造」とそれに適合した「効果のある指導」(指導論)

A校において、次世代を担う生徒に育むべき資質・能力について、ワークショップ型研修が展開され、「主体性」「協働性」「創造性」「自己有用感」の4つが共有された。合わせて、生徒983名のアセスメント

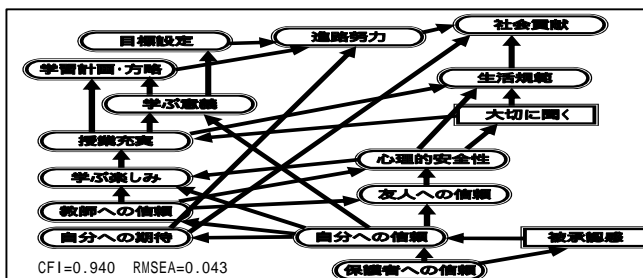


図3 生徒の意識と行動の構造図

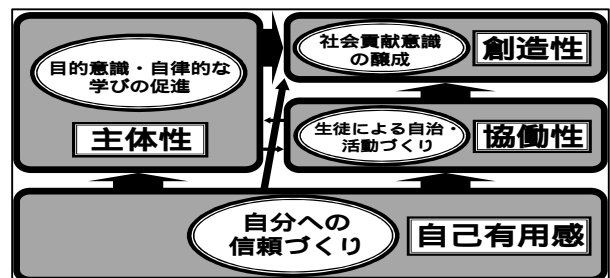


図4 育むべき資質能力の構造

トアンケートデータを共分散構造分析ソフト IBM SPSS Amos Ver.25 を用いて解析し、「A 高生徒の内面と行動の構造」(図3)が可視化され、育むべき資質能力との構造的な整合性が確認された(図4)。

(2) 教職員の主体的統合(組織化)を実現する学校組織マネジメント(組織論)

これらを根拠に生徒の主体性、協働性、創造性を育む「効果のある指導」が、組織的な省察(ワークショップ型研修)を通して構造的に策定され、組織的に展開された(図5)。

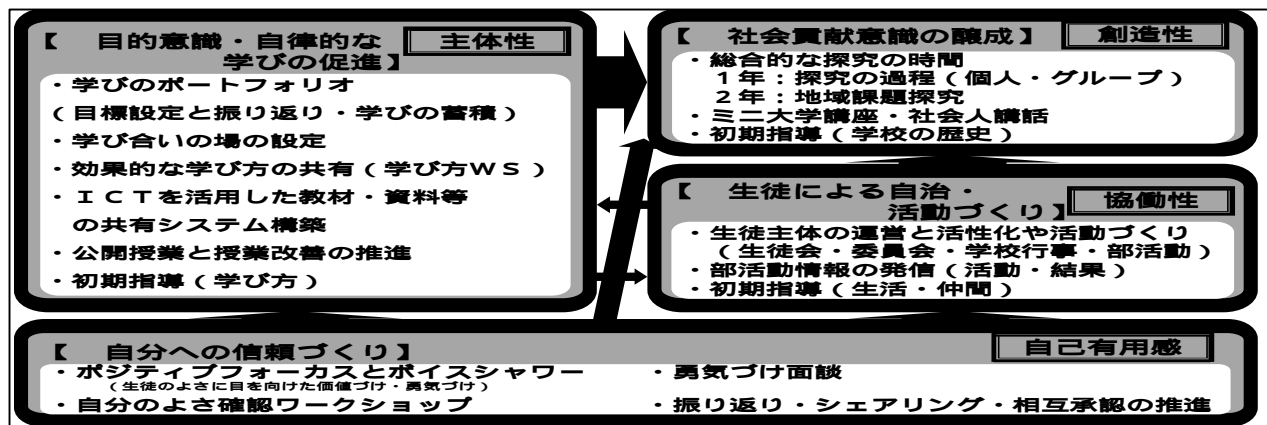


図5 課題解決のための「効果のある取組」

主体性を生み出す「学びのポートフォリオ」を中心とした「目的意識・自律的な学びの促進」。学級の協働性と『心理的安全性』を生み出す「生徒による自治・活動づくり」。創造性を育む「総合的な探究の時間」を中心とした「社会貢献意識の醸成」。すべての教育活動において『自尊感情』を育む「勇気づけ教育」が展開された。

(3) 実践研究の総括；生徒と教職員の変容

本実践研究の結果、生徒の「自己信頼の向上」、「目的意識の醸成」、「自律的な学びの促進」、自治活動を通じた「協働意識の向上」、「社会貢献意識の醸成」が確認された(図6)。

その生徒の変容を生み出した背景に、教職員の生徒の課題に基づく「勇気づけ教育」を含めた「組織的協働の促進」があった。「総合的な探求の時間」の導入と共に、「日々の授業改善」におけるデータも有意差をもって変容が促されたことが確認された。『自尊感情』の高まりと集団の『心理的安全性』の醸成によって、生徒の学びに向かう力「主体性」、人と繋がる力「協働性」、そして、新たな価値を生み出す「創造性」が高まったことが確認された。

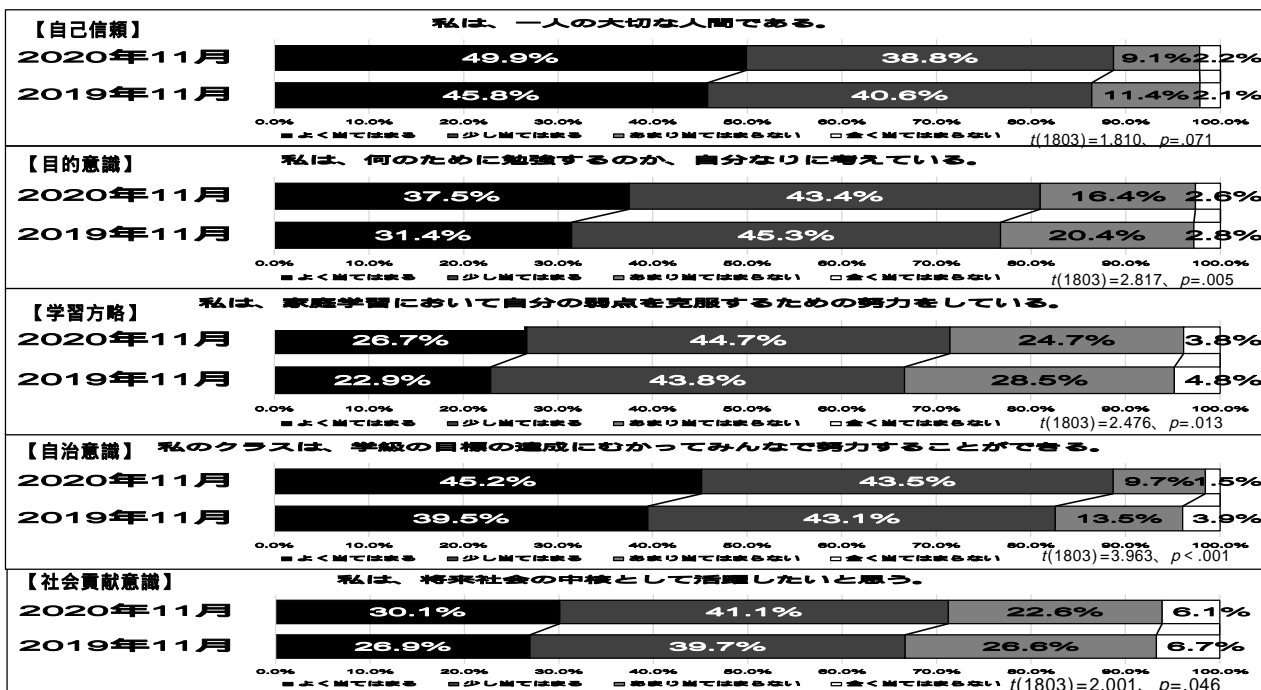


図6 総括評価アンケート結果(生徒)

さらに、この効果のある指導を組織的に展開することによって、子どもの変容と、教員の組織

化,本研究は,上述のように生起する学力低下やいじめ・不登校等の問題に対して,「子どもの内面と行動の構造」を可視化し,根源的な課題を抽出することで,エビデンスベースで「効果のある指導」を策定することを可能にした。そして, 教員の指導の質的転換を促すことを同時に具現化する可能性が一定程度明示された。この点において本研究の学術的な意義が指摘される。また、子どもの学びと生活の良質化において、個々の子どもの「自尊感情」と集団の「心理的安全性」を組織的に醸成することの有効性が確認された点について、本研究の実践的な意義が指摘される。また、本研究において、子どもの内面と行動の構造を学校単位で可視化し,学校ごとの効果のある指導を策定することを可能にしたこと(指導論)と,さらに, 効果のある指導を組織的に展開する学校組織マネジメントの展開手順(組織論)を明示し,これら指導論と組織論を融合した「効果のある学校づくり」が明示された点に独創性が指摘される。

<引用文献>

- 久我直人「中学生の内面と行動の構造に適合した教育改善プログラムの開発的研究 教育再生のシナリオの理論と実践」『教育実践学論集』, 15, 39-51, 2014
- 久我直人「教師の組織的省察に基づく教育改善プログラムの開発的研究 -「教師の主体的統合モデル」の基本理論 -」『教育実践学論集』, 12, 15-26, 2011
- 久我直人「教師の組織的省察に基づく教育改善プログラムの理論と実践 -「教師の主体的統合モデル」における組織的教育意思形成過程の展開とその効果 -」『教育実践学論集』, 14, 1-15, 2013
- 久我直人, 大杉信吾, 子どもの実態に基づく「効果のある学校づくり」の理論と実践—鳴門教育大学教職大学院における現任教実習を通じた学校改善の取り組み—, 日本教育大学協会研究年報, 第41集, 165 - 176, 2023

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

- 久我直人, A 中学校の生徒の内面と行動の構造に基づく学校改善プログラムの開発的研究, 日本教育大学協会研究年報, 査読有, 第38集, 2020, 117 - 128
- 西田寛子, 久我直人, 教員の協働を促すミドルリーダーのマネジメント行動にかかる一考察, 教育実践学研究, 査読有, 第22巻-1号, 2020, 17 - 31
- 久我直人, 大杉信吾, 子どもの実態に基づく「効果のある学校づくり」の理論と実践—鳴門教育大学教職大学院における現任教実習を通じた学校改善の取り組み—, 日本教育大学協会研究年報, 査読有, 第41集, 2023, 65 - 176

[学会発表](計3件)

- 久我直人, 子どもの実態にもとづく「効果のある学校づくり」の理論と実践, 令和2年度日本教育大学協会研究集会, 2022年10月1日
- 久我直人, 子どもの自尊感情と学級の心理的安全性の醸成を促す学校改善プログラムの開発的研究「勇気づけ教育」の組織的展開とその効果, 日本生徒指導学会, 2023年11月5日
- 星洸貴・久我直人, EBGC (Evidence-Based Guidance and Counseling) の在り方 ベイズ推定によるいじめの因果律検討を事例に, 日本生徒指導学会, 2023年11月5日

[図書](計5件)

- 久我直人, ふくろう出版, 「学級経営力」・「生徒指導力」向上講座 潤いのある学級をつくる教師の省察力と「勇気づけ教育」子どもとの信頼を築き, 不登校を生み出さない教師の特徴, 2020, 59
- 久我直人, 武田國宏, 学事出版, 『生徒指導学研究 第19号』, 「FEELBOTを活用した生徒指導」, 2020, 76 (31-37)
- 久我直人, 学事出版, 『チーム学校時代の生徒指導』, 「子どもの変容を生み出す「効果のある学校づくり」と生徒指導 pp141-154 効果のある学校づくり」の理論と実践, 2020, 168 (141-154)
- 久我直人, 学事出版, 『学校事務年報』, 「コロナ禍における学校の実態と求められる次世代の学校づくり」, 2021, 110(8-11)
- 久我直人, 学事出版, 『教育系博士課程におけるリカレント・モデルの構築』, 「教育系博士課程におけるリカレント教育の構築と課題」, 2023, 147 (19-34)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 久我直人	4. 巻 第38集
2. 論文標題 A中学校の生徒の内面と行動の構造に基づく学校改善プログラムの開発的研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育大学協会研究年報	6. 最初と最後の頁 117-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久我直人 大杉信吾	4. 巻 第41集
2. 論文標題 子どもの実態に基づく「効果のある学校づくり」の理論と実践－鳴門教育大学教職大学院における現任教 実習を通じた学校改善の取り組み－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本教育大学協会研究年報	6. 最初と最後の頁 165-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田寛子・久我直人	4. 巻 第36号
2. 論文標題 生徒が抱える教育課題の解決に向けた組織的な取組を生み出す校内研修システムの開発	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 鳴門教育大学学校教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 久我直人
2. 発表標題 子どもの自尊感情と学級の心理的安全性の醸成を促す学校改善 プログラムの開発的研究 「勇気づけ教育」の組織的展開とその効果
3. 学会等名 日本生徒指導学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 星洸貴 久我直人
2. 発表標題 EBGC (Evidence-Based Guidance and Counseling) の在り方 ベイズ推定によるいじめの因果律検討を事例に
3. 学会等名 日本生徒指導学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 久我直人
2. 発表標題 子どもの実態に基づく「効果のある学校づくり」の理論と実践－鳴門教育大学教職大学院における現任教実習を通じた学校改善の取り組み
3. 学会等名 令和 4 年度日本教育大学協会研究集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 溝邊和成、久我直人、高橋俊之、田村隆宏、西山修、松本剛、水落芳明、若田美香	4. 発行年 2023年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 147
3. 書名 教育系博士課程におけるリカレント・モデルの構築	

1. 著者名 久我直人	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 111
3. 書名 『日本教育事務学会年報』 「コロナ禍における学校の実態と求められる次世代の学校づくり」	

1. 著者名 佐古秀一 編著・久我直人 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 168
3. 書名 『チーム学校時代の生徒指導』子どもの変容を生み出す「効果のある学校づくり」と生徒指導	

1. 著者名 久我直人・武田國宏	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 76
3. 書名 『生徒指導学研究』FEELBOTを活用した生徒指導	

1. 著者名 久我直人	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ふくろう出版	5. 総ページ数 59
3. 書名 潤いのある学級をつくる教師の省察力と「勇気づけ教育」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------